

我が国における高齢者に関する心理学研究の概観

京都大学大学院教育学研究科 高齢者心理臨床研究会

清重英矩 (D2)、豊原響子 (D1)、文山知紗 (D1)、星野春香 (M1)

A Review of researches on the Elderly in Japan

KIYOSHIGE, Hidenori ; TOYOHARA, Kyoko ; FUMIYAMA, Chisa ;
HOSHINO, Haruka

キーワード：高齢者、文献レビュー、研究法分類

Key Words: Elderly, Review, Research method

1. 問題・目的

我が国では、国際的にも他に類を見ないほどの速さで高齢化が進んでいる。1963年に老人福祉法、1982年に老人保健法が制定されて以降、1995年には65歳以上の人口が全人口の14%を超える高齢社会となった。1997年には社会全体で高齢者を支え合うための介護保険法が成立するなど、社会保障制度の整備が行政によって進められ、その後の2010年には65歳以上の人口が全人口の21%を超える超高齢社会となっている。また、高齢者白書（内閣府、2018）によると、我が国における65歳以上人口は2025年に3,677万人に到達することが見込まれており、さらに2065年には国民の約2.6人に1人が65歳以上、3.9人に1人が75歳以上の者となる社会の到来が推計されている。そして、今後半世紀において国際的にも高齢化が急速に進むことが予想される中で、我が国においては高齢者に対する施策や支援の重要性の高まりと同様に、心理的援助の必要性がますます高まると考えられる。

我が国において高齢者とは、一般的に65歳以上の者を指す。高齢者の特徴としては、視覚や聴覚などの身体機能の低下や社会的活動の減少、認知症やその他精神的健康の低下など、加齢による変化に付随する病気とそのリスクの高まりが挙げられる。精神科医である竹中（1996）は、老年期をとりまく状況として①喪失体験、②孤立および孤独、③死の現前化、④適応、⑤人格・性格とその変化を挙げ、特に①喪失体験については自己像と心身の喪失、社会や家庭での立場や役割の喪失、人間関係の喪失、精神的な資産の喪失を挙げて詳細に論じている。高齢者支援に関わる者は、高齢者ひとりひとりの状況について理解しながら関わるのが重要になるだろう。よって、高齢者を支えていく社会を形成するためには、身体機能面などへの理解に加え、心理学的側面に焦点をあてた理解を深めていくことが求められる。

生涯発達の観点から Erikson (1986) は、老年期について「過去を思い出し、共通点のない多くの要素を一緒に織り込む時であり、これらのバラバラなものを意味の明瞭な全体へと統合する時期である」とし、高齢者自身の心理社会的課題について提示している。医学の発展により“死ねない”時代が来たとも言える現代においても、多く的高齢者がそれぞれの世界において、この課題に取り組むことになると考えられるが、それゆえの苦悩や悲哀もあると考えられる。医学の発展の一方で、上記で述べた認知症は誰でも発症する可能性があり、かつ現代の医学では完治が見込めない病気であるため、発症前には予期不安を喚起し、発症後には高齢者自身の実存性への危機を体験することになる。こうした高齢者個人の心理的側面へのアプローチは well-being や QOL などの概念が取り上げられるように、“よりよく生きる”ことを目指す動きを生んでいる。一方では、黒川 (2013) が高齢者に対する回想法について事例を取り上げながら詳述するなど、“生/死”にまつわるテーマやそれに寄り添う心理臨床学的な営みについても実践と研究が行われており、そこでは人生の終焉を迎える時期としての老年期に関する臨床の知が蓄積されている。

このように、高齢者の心理学研究は、医療や介護などさまざまな領域において臨床活動とともに行われてきている。ところが、これまで行われている多数の研究はそれぞれが独立してなされたものであり、高齢者の心理学研究全体としての位置付けは明確にされているとは言い難い。今後ますますの高齢化が見込まれる我が国においては、様々な観点から高齢者への理解を深め、より充実した支援や援助を行ってゆくことが必要であり、心理学研究について包括的に検討する基盤が必要であると言えるだろう。

こうした現状を踏まえ、本稿では、高齢者を対象とした直近 20 年における高齢者の心理学研究を概観し、今後の発展可能性について検討することを目的とした文献研究を行う。なお本稿では、高齢者の心理学研究を、高齢者自身の体験世界の理解に寄与する研究と捉え、主に論文数の年代推移と各論文における研究法という 2 つの観点から概観を行うこととした。論文数の年代推移について検討することで全体像を把握し、各論文における研究法についての検討を通して直近 20 年の高齢者の心理を対象とした研究の特徴を考察することを目的としている。無論、研究における主題も重要な観点ではあるが、この点については別稿で論じることとする。

II. 方法

1998 年～2018 年に発刊された『心理臨床学研究』、『発達心理学研究』、『心理学研究』、『箱庭療法学研究』に掲載されている論文の中から、「高齢者」というキーワードに焦点をあてて論文を検索した。今回上記 4 雑誌を分析対象とした理由としては、これらが我が国における心理学研究の代表的学術雑誌であり、入手が容易であったことが挙げられる。今回は高齢者自身の体験世界の理解が目的であるため、高齢者の心理的特徴、認知機能、主観的体験、発達の課題などを焦点とした研究を分析の対象とし、家族や援助者に重点を置いた研究は対象外とした。

分析対象となる論文を選定した後、まずこれらの分析対象となった論文を年代順に並べ数量的推移に関して検討を行った。次にこれらの論文一つ一つを、佐々木 (2012) の研究法による分類を参考に分類を試みた。佐々木 (2012) は研究法の分類に関して、研究対象による分類である「臨床研究-非臨床研究」という軸と、分析方法による分類である「質的研究-数量的研究」という軸の 2 軸の組み合わせを

用いている。研究対象による分類のうち、「臨床研究」とは「文字通り臨床実践の場で起こることを記述しそれについて様々な考察を加えることによって成立する研究」とされ、一方「非臨床研究」とは、「被検者（協力者）が研究者の要請によって研究に参加し、研究の目的によって面接を受け、質問紙に回答し、あるいは絵を描くなどの行為を行う研究」とされている。また、分析方法による分類のうち、「質的研究」とは「データの数量化を前提としない研究」、「数量的研究」とは「研究した事象を数量化し統計的な手法を用いて行う研究」とされている。これらの2軸を組み合わせることによって、研究法による4つの群に分類することが可能になると考えられる。佐々木（2012）はこの分類を風景構成法研究の分類に用いているため、今回の趣旨とは若干の相違があるものの、高齢者の心理学研究の分類を試みるにあたって有用であると思われるため採用することとした。上記の分類に当たっては、臨床心理学を専攻とする共著者4名が各自割り当てられた論文について判定を行い、判定に迷いが生じたものについては共著者4名で協議の上、判定を行った。

Ⅲ. 結果

上記の発刊された学術雑誌に掲載された論文のうち、分析対象とした論文は『心理臨床学研究』39本、『発達心理学研究』18本、『心理学研究』17本、『箱庭療法学研究』4本の計78本であった。

直近20年における1年間あたりの平均は3.9本（ $SD=2.00, R=1\sim 9$ ）である。2003年の9本が最も多く、次いで多かったのは1998年と2014年の7本であった。なお、2007年の1本が最も少なかった。1998年～2017年における3年ごとの年代推移を図1に示す。3年ごとの推移においては、2012～2014年の計18本が最も多く、2015～2017年の計7本が最も少なかった。

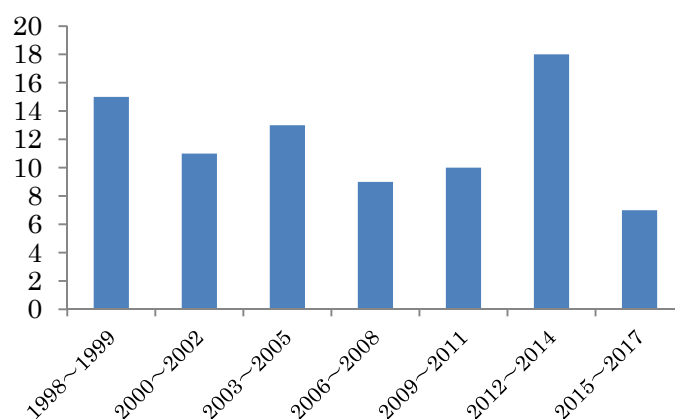


図1. 分析対象とした高齢者心理学研究の3年ごとの推移（1998～2017年）

過去20年間における研究法による分類の結果は以下の通りである。「臨床-質的」24本、「臨床-数量的」0本、「非臨床-質的」17本、「非臨床-数量的」36本であった。詳細な内容については表1-1、表1-2の一覧を参照されたい。また分析対象論文のうち、市岡（2000）は高齢者の体験過程について数量的研究を行った上で、個別事例について質的に検討を行っており、この論文を表すものとして新たに「非臨床-数量的・質的」というカテゴリを設けた。結果、今回分析対象とした学術雑誌においては「非臨床-数量的」が最も多く、「臨床-数量的」は掲載されていないという結果を示した。

本稿において分析対象とした論文一覧を、研究法による分類別に年代順に並べた形で表 1-1、表 1-2 に示した。なお、各研究分類に該当する論文の数は表 1-1、表 1-2 の括弧内に記載した。

IV. 考察

1. 高齢者論文の年代推移

今回、分析の対象とした学術雑誌において、高齢者心理学に関する論文は直近 20 年間に於いて 1 年間あたり平均で 3.9 本掲載されており、2007 年を除いて毎年複数の論文が掲載されている。我が国においては、1995 年に高齢社会を迎えた後、1997 年には介護保険法が成立し社会保障制度の整備が進められてきた。その後、2010 年に超高齢社会となり、今なお高齢者にまつわる問題には社会的関心が寄せられていると言えよう。今回分析対象とした 1998 年以降は、こうした社会的背景による影響も一因となり、心理学の分野においても高齢者を対象とした研究が継続的、安定的に行われてきたものと考えられる。また、本研究の結果からは 2013 年以降の 5 年間で掲載された論文は 23 本であり、それまでの 5 年間における 14 本と比較して大幅な増加を示していることが明らかとなった。このことの背景には、2012 年に「団塊の世代」と呼ばれる世代が 65 歳に達し、日本社会全体がますますの高齢化を指摘されるようになったこととの関連も窺われ、こうした社会的背景の中で高齢者への心理的な支援に取り組もうとする動向が活発化した可能性が考えられる。

2. 分類の結果から

分析の対象とした論文に関して研究法による分類をしたところ、「臨床-数量的」研究は 0 本という結果を示した。臨床的な営みを検討する際に数量的な手法を用いることは困難な場合が多い。それは個々の臨床場面で生じる豊かな個別性を単純化することで削ぎ落としてしまう可能性があるためである。そして、その困難さは特に高齢者においてはより大きな問題となることが推察される。その要因の一つには高齢者のもつ個別性・多様性の問題がある。高齢者自身の知的能力や認知機能、これまで経験してきたライフイベントや高齢者自身の取り巻く周囲の環境などの差によって、数値の意味合いが均一化されにくい可能性を孕んでいるということである。ただし、このことは数量的に検討することが不可能であることを示しているのではない。今回対象とした論文の中にも数量的な検討を試みているものをいくつか認めることができる。統計的な手法を用いていないため「数量的研究」には該当しないと判定したが、中原 (1998) は臨床場面に関わりを持った 193 事例のさまざまな側面について数量化し検討を試みている。また、今回は「数量的・質的」のカテゴリに分類したような、数量のみではなく質的研究も合わせて行っている研究 (市岡, 2000) もあり、高齢者の心理学に関する数量的研究は不十分ながらも試みられていると言える。したがって、高齢者における心理臨床的な営みを数量的研究の俎上に載せる際にはそれ相応の工夫が必要になるが、今後の研究としての十分な発展可能性があると考えられる。

表1-1. 分析対象論文一覧（括弧内は研究法分類における該当論文数）

| 臨床・質的（24本） | |
|--------------------------------------|---|
| 1998 橋木てる子・下垣 光・小野寺敦志 | 回想法を用いた痴呆性老人の集団療法 |
| 1998 岩橋宗哉・大崎知子 | 間主観的な場における体験の具体化とそれへの主観的妥当性確認について—痴呆性老人への心理療法的アプローチから— |
| 1998 中原睦美 | 中高年脳卒中患者の障害受容と援助—リハビリ意欲と居場所との関係に着目して— |
| 1998 北添紀子 | 痴呆老人の役割意識と精神症状 |
| 1999 岩橋知子・岩橋宗哉 | 重度痴呆性老人の体験を共有しようとする試み—抱える環境としてのプレパバるな関わり— |
| 1999 林 智一 | 人生の統合期の心理療法におけるライフレビュー |
| 2000 林 智一 | 老人保健施設における心理療法的接近の試み—長期入所の高齢期女性との心理面接過程から— |
| 2001 石崎淳一 | コラージュに見る痴呆高齢者の内的世界—中等度アルツハイマー病患者の作品から— |
| 2002 松田 修・黒川由紀子・斎藤正彦・丸山 香 | 回想法を中心とした痴呆性高齢者に対する集団心理療法—痴呆の進行に応じた働きかけの工夫について— |
| 2003 蒲生紀子 | 特別養護老人ホームでの心理的援助の役割—対応困難者と環境調整— |
| 2005 蒲生紀子 | 歌に守られた痴呆性入居者の旅立ち—環境調整と「体験的統合」— |
| 2005 竹田伸也・井上雅彦 | 重度認知症高齢者への動作療法の治療要因 |
| 2005 貞木隆志・小海宏之・岡村香織 | 色塗り法に反映される痴呆性高齢者の予後と臨床像の変化 |
| 2006 平山篤史 | 失語症を伴う長期入院高齢者とのロールプレイを利用した面接過程—回想を取りあげ場面設定に用いた事例— |
| 2006 松田 修 | 若年性アルツハイマー病に対する心理教育的配慮に基づく認知リハビリテーションの事例 |
| 2007 秋本倫子 | 83歳の脳血管障害患者のリハビリテーションの一事例—箱庭によって語られた物語— |
| 2008 鈴木亮子 | 認知高齢者への心理学的援助としての個人回想法 |
| 2013 小西 徹 | 高齢期に夫と死別した女性との心理療法における老いの受容過程 |
| 2013 吉川桃子 | 地域在住認知症高齢者の居場所をつくる心理臨床学的支援—高齢者間の相互的交流と役割感に着目して— |
| 2013 深瀬裕子・岡本祐子 | 施設入所高齢者との心理療法における事例理解—Eriksonの心理社会的課題の援用— |
| 2013 上倉安代・大高基恵子 | 回想法による認知症の人の心理的な変化を追って |
| 2015 上倉安代・益子洋人・加地由美子 | 病院臨床における関わりが困難な認知症患者への集団回想法の効果 |
| 2016 河地由恵・中島恵子 | 脳梗塞後に高次機能障害を呈した高齢者への注意機能訓練 |
| 2017 北山 純 | 老年期における「わたし」の生成 |
| 非臨床・質的（17本） | |
| 2000 山口智子 | 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み—回想についての基礎的研究として— |
| 2001 柴田雄企 | STA(高齢者絵画統覚検査)の軽度痴呆性高齢者への有効性 痴呆のない高齢者との比較 |
| 2002 山口智子 | 人生の語りにおける語りの変容について—高齢者の回想に関する基礎的研究— |
| 2003 佐々木直美・上里一郎 | 特別養護老人ホームの軽度痴呆高齢者に対する集団回想法の効果の検討—MMS, 行動評価, バウムテストを用いて— |
| 2005 松本光太郎 | 高齢者の生活において外出が持つ意味と価値—在宅高齢者の外出に同行して— |
| 2005 野村晴夫 | 構造的・一貫性に着目したナラティブ分析—高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討— |
| 2008 原 千恵子 | 認知症高齢者への治療的関わり—箱庭療法の可能性— |
| 2009 竹田伸也・井上雅彦 | 慢性疼痛を呈した高齢者に対する動作療法の試み |
| 2010 原 千恵子 | 認知症高齢者が箱庭療法で表現したもの |
| 2010 深瀬裕子・岡本祐子 | 老年期における心理社会的課題の特質—Eriksonによる精神分析的個体発達分化の図式第四段階の再検討— |
| 2011 大石真吾・高橋優佳・浅田恵美子・井芹聖文・千秋佳世・加藤奈奈子 | 特別養護老人ホームに箱庭を持ち込む試み—「鮮やかさ」という視点の生成— |
| 2012 深瀬裕子・岡本祐子 | 高齢者の語りに基づく母親の人物との相互性の変容 |
| 2013 小澤義雄 | 老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造 |
| 2013 北野祥子・古賀 聡 | 認知障害を抱える女性高齢患者への心理劇の適用 |
| 2013 竹村明子・仲 真紀子 | 身体や健康の衰退に調和するための高齢者の対処—二次的コントロール理論を基に— |
| 2014 野村晴夫 | 生活史面接後の「内なる語り」—中高年の不随意的想起に着目した調査— |
| 2014 高橋紗也子 | 初期アルツハイマー型認知症の高齢者の内的世界—風景構成法の風景に位置づけられる自己像を通して— |

表1-2. 分析対象論文一覧 (括弧内は研究法分類における該当論文数)

非臨床・数量的 (36本)

| | |
|---|---|
| 1998 佐々木直美・柿井昇治 | 加齢にともなう心理・生理的機能の変容—バウムテスト、GHQ、要求水準課題および心臓血管系反応を指標として— |
| 1998 権藤恭之・石原 治・中里克治・下仲順子・Leonard W. Poon | 心的回転課題による高齢者の認知処理速度遅延の検討 |
| 1998 山下 光 | アルツハイマー病患者の言語性短期記憶障害—自由再生法による検討— |
| 1999 星野和実 | 高齢者から見た生涯発達過程—職業生活に関する検討— |
| 2000 今川峰子・謙西 賢・齊藤善弘 | 中年者及び高齢者の家族メンバーに対するパーソナル・スペースの検討 |
| 2000 山田典子 | 老年期における余暇活動の型と生活満足度・心理社会的発達の関連 |
| 2001 野村信威・橋本 幸 | 老年期における回想の質と適応との関連 |
| 2002 福川康之・坪井さとみ・新野直明・安藤富士子・小杉正太郎・下方浩史 | 中高年のストレスおよび対人交流と抑うつとの関連—家族関係の肯定的側面と否定的側面— |
| 2003 貞木隆志・小海宏之・朝比奈恭子・岡村香織 | 色塗り法に反映される痴呆性高齢者の臨床像 |
| 2004 河合千恵子・佐々木正宏 | 配偶者の死への適応とサクセスフルエイジング—16年にわたる縦断研究からの検討— |
| 2004 吉川麻衣子・田中寛二 | 沖縄県の高齢者を対象とした戦争体験の回想に関する基礎的研究 |
| 2004 妹尾香織・高木 修 | 高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連 |
| 2004 原 千恵子 | 痴呆性高齢者のための包括的心理療法—化粧療法を中心として— |
| 2004 宮川貴美子 | 高齢者による箱庭制作の試み |
| 2006 槇 洋一・仲 真紀子 | 高齢者の自伝的記憶におけるバンフと記憶内容 |
| 2006 野村信威・橋本 幸 | 地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み |
| 2006 若本純子・無藤 隆 | 中高年期における主観的老いの経験 |
| 2008 孫 琴 | 認知高齢者の抑制機能に関する研究: 抑制機能及び関連する認知機能を中心とした検討 |
| 2009 久保(河合)南海子・坂田陽子 | 顔刺激からの注意の解放における加齢の影響 |
| 2009 野村信威 | 地域在住高齢者に対する個人回想法の自尊感情への効果の検討 |
| 2010 荒井佐和子・片山禎夫・兒玉憲一 | 軽症アルツハイマー病患者の抑うつ気分と認知機能障害および記憶障害の自覚との関連 |
| 2011 田淵 恵・権藤恭之 | 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響 |
| 2011 福住昌美・森川将行・岡本 望・車谷典男・岸本年史・佐藤 豪 | 高齢者を対象としたバウムテストにおける教示の比較研究 |
| 2011 中原 純 | 前期高齢者の祖父母役割と主観的well-beingの関係 |
| 2012 西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史 | 中高年者の開放性が知能の経時変化に及ぼす影響—6年間の縦断的検討— |
| 2013 中川 威・権藤恭之・増井幸恵・石岡良子・田淵 恵・神出 計・池邊一典・新井康通・高橋龍太郎 | 日本語版Valuation of Life(VOL)尺度の作成 |
| 2013 足立匡基 | 臨床動作法による内的統制傾向の強化が高齢者の心理的適応に与える影響 |
| 2014 坂田陽子・口ノ町康夫 | 対象物の形、模様、色特徴抽出能力の生涯発達の变化 |
| 2014 田淵 恵・三浦麻子 | 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討 |
| 2014 田淵 恵・三浦麻子 | 高齢者の利他的行動としての「語り」に与える世代間相互作用の影響—実験場面を用いた検討— |
| 2014 吉田 甫・孫 琴・土田宣明・大川一郎 | 学習活動の遂行で健康高齢者の認知機能を改善できるか—転移効果から— |
| 2014 西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史 | 高齢者における知能と抑うつの相互関係—交差遅延効果モデルによる検討— |
| 2015 川本哲也・小塩真司・阿部晋吾・坪田祐基・平島太郎・伊藤大幸・谷 伊織 | ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差—大規模横断調査による検討— |
| 2015 石岡良子・権藤恭之・増井幸恵・中川 威・田淵 恵・小川まどか・神出 計・池邊一典・新井康通・石崎達郎・高橋龍太郎 | 仕事の複雑性と高齢期の記憶および推論能力との関連 |
| 2016 矢口大雄・亀口憲治 | 軽量粘土を介した認知症高齢者と援助者の相互影響過程 |
| 2017 太田一実・村山憲男 | WAIS-IIIの簡易実施法はレビー小体型認知症の認知機能評価にも利用できるのか |

非臨床・質的・数量的 (1本)

| | |
|-----------|--------------------|
| 2000 市岡陽子 | 体験過程理論に基づく高齢者心理の研究 |
|-----------|--------------------|

「臨床-数量的」研究の例としては、第一に臨床実践の場で得られた認知機能検査や知能検査等について数量的に検討することが挙げられる。この際、異なる集団から得られた結果を一時点において比較する横断的研究のみでなく、個人内における経年変化について検討する縦断的研究や、時代背景による影響を検討するコホート研究を重ねてゆくことも必要であろう。第二に、病いを抱える高齢者への理解をより深めるためには、例えば認知症の種類別・重症度別に数量的検討を行うなど、ひとつの疾患をより詳細に検討することによっても重要な示唆が得られるであろう。第三に、投映法においては発達的な視点から検討されたものは多くあるが、高齢者の反応の特徴については十分に知見が蓄積されているとは言い難い。この点については今回分析対象としなかった学術雑誌等には少なからず存在しており、例えば星野ら（1994）、小林（2000）、西尾（2018）はロールシャッハ・テスト、TAT、バウムテストなど、各種投映法における高齢者の反応の特徴について考察を行い、様々な知見を提示している。しかしながらこれらは、重症度別の検討がなされていない（星野ら, 1994）、個別的な検討に留まっている（小林, 2000）、高齢者の中でも女性のみを対象としている（西尾, 2018）など、高齢者の反応に関する包括的検討には至っていないと考えられる。臨床現場において出会う高齢者の理解を今後より一層深めてゆくためには、地域在住の健常高齢者だけでなく多様な背景を持つ高齢者についても数量的検討を行い、様々な投映法における反応内容・様式やその特徴を体系的にまとめてゆくことが必要であろう。

次に、「非臨床-数量的」研究に関しては5つの分類のうち、最も多く36本という結果を示した。「非臨床-数量的」研究は多数の対象者から得た数量化データを統計的手法により検討するため、より客観的である程度の妥当性が保証される研究方法である。しかし、その中でも非臨床研究の場合には調査協力に自ら同意し参加可能な比較的健康度の高い高齢者が多いと考えられ、高齢者の全体像を捉えているとは言い難い側面がある。高齢者に限らずともサンプリングの問題は存在するが、さまざまな点から標準的な高齢者を想定することの困難さは、より顕著な影響を与えることが推察される。もちろん「非臨床-数量的」研究によって明らかにされることは極めて重要であるが、その適用範囲については慎重な態度を要すると言えるだろう。このように考えると、現在、「高齢者」としてまとめられている対象をより細分化して検討することも今後必要になると言える。例えば、年齢や性別などの生物学的な区分を用いることも可能であろう。その他にも、ADLや認知機能の状態など身体・精神疾患を基軸とした区分、家族関係や社会的活動の範囲や内容など社会的役割を基軸とした区分、配偶者との死別や孫の誕生などライフイベントを基軸とした区分など、さまざまな観点から高齢者を詳細に検討することを通して、より高齢者の内実に迫ることが可能になると思われる。

今回の分析対象の内、「臨床-質的」研究は「非臨床-数量的」研究に次いで24本であった。臨床場面で生じていることを質的に検討していく方法は、高齢者の個別性に応える方法として重要であると考えられる。特に介護や看護、高齢者福祉等の現場において実践的に高齢者と関わるうえでは、よりミクロな視点から個々の高齢者のこころの在り様を捉え、寄り添おうとすることが不可欠であると思われる。竹中（1996）は、老年期の心理特性に一定のパターンがあるという見方については否定的な見解を示し、個別性をふまえた研究の原点として一例一例を丹念に記述しながら考察していく方法を挙げている。つまり、一人ひとりの生活史や現在の人間関係や生活状況を丁寧に汲み取ることを疎かにせず、拙速な類型化（カテゴライズ）には慎重な姿勢を持つことが必要かもしれない。その反面、佐々木（2012）は、

「一般化可能であることは前提とされていない」ことを質的研究の特徴の一つとして挙げている。したがって、「臨床-質的」研究を一般化する際には、その結果が適用されうる範囲について慎重に検討する必要があると考えられる。中でも高齢者は様々な要因による個人差が大きいため、“標準的な高齢者”を想定することが難しく、得られた知見をいかに一般化することが可能であるのかを考えることはその他の領域以上に慎重さが求められると考えられる。

3. 高齢者研究の分類の困難さ

高齢者の心理学研究を概観するにあたって、佐々木(2012)による研究方法による分類を採用したが、今回対象とした論文の中には分類困難であったものも存在した。これは研究における著者の立場が明確でないことになる場合もあるが、大きな要因の一つとしては高齢者の多様性・個性が挙げられる。

筆者らは高齢者研究の特徴のひとつとして、対象となる高齢者のうち、臨床群と表現される人々と非臨床群と表現される人々たちの境目が曖昧になるのではないかと考えている。一般的に、臨床群と表現される人々は何かしらの困難さや生きづらさを抱えていることが想定される。しかし老年期においては、誰しも加齢に伴って少なからず心身機能の低下が生じるものであり、諸機能の低下度合いやそれにより顕在化する症状は個人の人々の特性によって様々である。また、同様の症状を抱えている人々でも、周囲のサポートの有無により在宅での暮らしを継続する場合もあれば、施設に入所する場合もある。また先述したことではあるが、一言で高齢者と言っても彼ら・彼女らが生きてきた歴史的背景には非常に大きな幅がある。例えば、第二次世界大戦時に戦地に赴き壮絶な体験をした者と当時まだ生まれてすらいなかった者とは、その体験様式は異なっても不思議ではない。そして、その相違はそれぞれのこころの在り様の違いに少なからず影響を及ぼしていると考えられ、そこから生じる困難さや生きづらさは類似した訴えであってもその意味合いは全く異なるものだろう。このように、老年期においてはそれ以前の発達段階に比べてより多様な要因が交絡して現在の状況に至っていることが推察されるため、ある特定の基準のみによって困難さや生きづらさの程度を判断することが困難となり、ともすれば臨床群と非臨床群の境目が曖昧となるように考えられる。そしてそこに高齢者の心理学研究における特徴があると言えるのではないだろうか。したがって、佐々木(2012)の分類は心理学研究の方法論に関するものであるためそれに則って分類することは一定の意義を持つと思われるが、一方ではそのまま適用するのみでは捉えきれない部分もあると考えられる。上記の特徴を踏まえると、今後高齢者の心理学研究について検討する際には分類の定義の再検討や新たな分類方法の検討などを試みる必要があると考えられる。

V. 今後の課題と展望

最後に本研究の課題についてまとめたい。今回対象とした論文は限られた範囲でのものであり、高齢者研究のすべてを概観できたとは言えない。今後はより幅広い文献を対象とした文献研究も必要となると考えられる。ひとまず本研究からは、研究方法による分類に関して高齢者研究特有のものがあることが示唆され、今後の高齢者研究においては研究方法の定義を見直す必要性も見出されたと言えるだろう。

今日、高齢者自身や彼らに関わる周囲の人々の環境は刻一刻と変化している。高齢者に対する心理的

援助に関しても、完治を目指すことから QOL の維持や生活環境の調整などを重視する“cure から care へ”のパラダイムシフトも影響しているだろう。また、高齢者研究においても他分野と同様に、マクロとミクロの視点両方が必要であろう。例えばマクロの視点としては、社会的存在としての高齢者に関する検討や他の年齢層との比較検討を通じて高齢者独自の特徴を捉えることが挙げられる。加えて、特に介護・看護・高齢者福祉等の現場において高齢者と関わるうえでは、よりミクロな視点から個別的なこころの在り様を捉えることも不可欠であると思われる。これらは決して二律背反的ではなく同時的・並行的に行われていく必要があるだろう。さらに、今後高齢化問題に直面することが予想される諸外国にとっても、持続可能な超高齢社会モデルを構築することは喫緊の課題と言えよう。この際、既に様々な研究で指摘されているように、西洋と東洋、あるいはその他諸外国との文化比較は極めて重要な観点であると思われる。今後の高齢者の心理学研究は時代やパラダイムの変化も考慮に入れつつ発展させていく必要があると言えるだろう。

本稿では研究の主題については検討していないが、今後研究内容についても考察を深めることによって、高齢者研究の様相をより詳細に検討することができるように思われる。この点については今後更なる研究を積み重ねることで、より多様な観点から高齢者研究について検討してゆきたい。

文 献

- 足立匡基(2013). 臨床動作法による内的統制傾向の強化が高齢者の心理的適応に与える影響. 心理臨床学研究, 31(2), 245-256.
- 秋本倫子(2007). 83歳の脳血管障害患者のリハビリテーションの一事例—箱庭によって語られた物語—. 心理臨床学研究, 24(6), 653-663.
- 荒井佐和子・片山禎夫・兒玉憲一(2010). 軽症アルツハイマー病患者の抑うつ気分と認知機能障害および記憶障害の自覚との関連. 心理臨床学研究, 28(3), 353-357.
- Erikson, E. H., Erikson, J. H. & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital Involvement in Old Age*. W.W.Norton & Company, N.Y. (朝長正徳・朝長梨枝子(訳)(1990). 老年期 生き生きしたかかわりあい. みすず書房.)
- 深瀬裕子・岡本祐子(2010). 老年期における心理社会的課題の特質—Erikson による精神分析的个体発達分化の図式第Ⅷ段階の再検討. 発達心理学研究, 21(3), 266-277.
- 深瀬裕子・岡本祐子(2012). 高齢者の語りに基づく母親的人物との相互性の変容. 発達心理学研究, 23(1), 55-65.
- 深瀬裕子・岡本祐子(2013). 施設入所高齢者との心理療法における事例理解—Eriksonの心理社会的課題の援用—. 心理臨床学研究, 31(5), 725-735.
- 福川康之・坪井さとみ・新野直明・安藤富士子・小杉正太郎・下方浩史(2002). 中高年のストレスおよび対人交流と抑うつとの関連—家族関係の肯定的側面と否定的側面—. 発達心理学研究, 13(1), 42-50.
- 福住昌美・森川将行・岡本 望・車谷典男・岸本年史・佐藤 豪(2011). 高齢者を対象としたバウムテストにおける教示の比較研究. 心理学研究, 82(2), 183-188.
- 蒲生紀子(2003). 特別養護老人ホームでの心理的援助の役割—対応困難者と環境調整—. 心理臨床学研究, 21(4), 341-352.
- 蒲生紀子(2005). 歌に守られた痴呆性入居者の旅立ち—環境調整と「体験的統合」—. 心理臨床学研究, 23(1), 86-97.
- 権藤恭之・石原 治・中里克治・下仲順子・Leonard W. Poon(1998). 心的回転課題による高齢者の認知処理速度遅延の検討. 心理学研究, 69(5), 393-400.
- 林 智一(1999). 人生の統合期の心理療法におけるライフレビュー. 心理臨床学研究, 17(4), 390-400.
- 林 智一(2000). 老人保健施設における心理療法的接近の試み—長期入所の高齢期女性との心理面接過程から—. 心理臨床学研究, 18(1), 58-68.
- 原千恵子(2004). 痴呆性高齢者のための包括的心理療法—化粧療法を中心として—. 心理臨床学研究, 22(5), 511-519.
- 原千恵子(2008). 認知症高齢者への治療的関わり—箱庭療法の可能性—. 心理臨床学研究, 25(6), 636-646.
- 原千恵子(2010). 認知症高齢者が箱庭療法で表現したもの. 箱庭療法学研究, 23(1), 47-58.
- 平山篤史(2006). 失語症を伴う長期入院高齢者とのロールプレイを利用した面接過程—回想を取りあげ場面設定に用いた事例—. 心理臨床学研究, 23(6), 671-682.
- 星野和実(1999). 高齢者から見た生涯発達過程—職業生活に関する検討—. 心理学研究, 70(5), 401-408.
- 星野良一・宮里勝政・岡本典雄・近藤直樹・大原健士郎・有馬良一(1994). アルツハイマー型老年痴呆と脳血管性痴呆の認知機能に関する比較研究. 老年精神医学雑誌 5(1). pp.63-71.
- 本田美和子・イヴ・ジネスト・ロゼット・マレスコッティ(2014). ユマニチュード入門. 医学書院

- 市岡陽子(2000). 体験過程理論に基づく高齢者心理の研究. 心理臨床学研究, 17(6), 550-559.
- 今川峰子・談 西賢・齊藤善弘(2000). 中年者及び高齢者の家族メンバーに対するパーソナル・スペースの検討. 発達心理学研究, 17(3), 212-222.
- 石岡良子・権藤恭之・増井幸恵・中川 威・田淵恵・小川まどか・神出 計・池邊一典・新井康通・石崎達郎・高橋龍太郎(2015). 仕事の複雑性と高齢期の記憶および推論能力との関連. 心理学研究, 86(3), 219-229.
- 石崎淳一(2001). コラージュに見る痴呆高齢者の内的世界—中等度アルツハイマー病患者の作品から—. 心理臨床学研究, 19(3), 278-289.
- 岩橋宗哉・大崎知子(1998). 間主観的な場における体験の具体化とそれへの主観的妥当性確認について—痴呆性老人への心理療法的アプローチから—. 心理臨床学研究, 16(2), 117-128.
- 岩橋知子・岩橋宗哉(1999). 重度痴呆性老人の体験を共有しようとする試み—抱える環境としてのプレパラブルな関わり—. 心理臨床学研究, 17(1), 55-66.
- 上倉安代・大高基恵子(2013). 回想法による認知症の人の心理的な変化を追って. 心理臨床学研究, 31(1), 118-128.
- 上倉安代・益子洋人・加地由美子(2015). 病院臨床における関わりの困難な認知症患者への集団回想法の効果. 心理臨床学研究, 33(2), 185-190.
- 河合千恵子・佐々木正宏(2004). 配偶者の死への適応とサクセスフルエイジング—16年にわたる縦断研究からの検討—. 心理学研究, 75(1), 49-58.
- 河地由恵・中島恵子(2016). 脳梗塞後に高次機能障害を呈した高齢者への注意機能訓練. 心理臨床学研究, 33(6), 613-624.
- 川本哲也・小塩真司・阿部晋吾・坪田祐基・平島太郎・伊藤大幸・谷 伊織(2015). ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差—大規模横断調査による検討—. 発達心理学研究, 26(2), 107-122.
- 北野祥子・古賀 聡(2013). 認知障害を抱える女性高齢患者への心理劇の適用. 心理臨床学研究, 31(2), 257-267.
- 北添紀子(1998). 痴呆老人の役割意識と精神症状. 心理臨床学研究, 16(4), 334-340.
- 北山 純(2017). 老年期における「わたし」の生成. 箱庭療法学研究, 30(2), 27-38.
- 久保(河合)南海子・坂田陽子(2009). 顔刺激からの注意の解放における加齢の影響. 発達心理学研究, 20(1), 66-73.
- 黒川由紀子(2013). 高齢者と心理臨床 衣・食・住をめぐって. 誠信書房.
- 小林敏子(2000). 高齢者介護と心理. 朱鷺書房.
- 小西 徹(2013). 高齢期に夫と死別した女性との心理療法における老いの受容過程. 心理臨床学研究, 31(3), 399-409.
- 槇 洋一・仲 真紀子(2006). 高齢者の自伝的記憶におけるパンフと記憶内容. 心理学研究, 77(4), 333-341.
- 松田 修・黒川由紀子・斎藤正彦・丸山 香(2002). 回想法を中心とした痴呆性高齢者に対する集団心理療法 痴呆の進行に応じた働きかけの工夫について. 心理臨床学研究, 19(6), 566-577.
- 松田 修(2006). 若年性アルツハイマー病に対する心理教育的配慮に基づく認知リハビリテーションの事例. 心理臨床学研究, 24(5), 559-570.
- 松本光太郎(2005). 高齢者の生活において外出が持つ意味と価値—在宅高齢者の外出に同行して—. 発達心理学研究, 16(3), 265-275.
- 宮川貴美子(2004). 高齢者による箱庭制作の試み. 箱庭療法学研究, 17(2), 33-50.
- 長田由紀子・長田久夫(1994). 高齢者の回想と適応に関する研究. 発達心理学研究, 5(1), 1-10.
- 中川 威・権藤恭之・増井幸恵・石岡良子・田淵 恵・神出 計・池邊一典・新井康通・高橋龍太郎(2013). 日本語版 Valuation of Life (VOL) 尺度の作成. 心理学研究, 84(1), 37-46.
- 中原 純(2011). 前期高齢者の祖父母役割と主観的 well-being の関係. 心理学研究, 82(2), 158-166.
- 中原睦美(1998). 中高年脳卒中患者の障害受容と援助—リハビリ意欲と居場所との関係に着目して—. 心理臨床学研究, 15(6), 625-646.
- 西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史(2012). 中高年者の開放性が知能の経時変化に及ぼす影響—6年間の縦断的検討—. 発達心理学研究, 23(3), 276-286.
- 西田裕紀子・丹下智香子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史(2014). 高齢者における知能と抑うつとの相互関係—交差遅延効果モデルによる検討—. 発達心理学研究, 25(1), 76-86.
- 西尾ゆう子(2018). 老年期女性の心的世界—「枯れない心」に寄り添う. 誠信書房.
- 野村信威・橋本 宰(2001). 老年期における回想の質と適応との関連. 発達心理学研究, 12(2), 75-86.
- 野村信威・橋本 宰(2006). 地域在住高齢者に対するグループ回想法の試み. 心理学研究, 77(1), 32-39.
- 野村信威(2009). 地域在住高齢者に対する個人回想法の自尊感情への効果の検討. 心理学研究, 80(1), 42-47.
- 野村晴夫(2005). 構造的—貫性に着目したナラティブ分析—高齢者の人生転機の語りに基づく方法論的検討—. 発達心理学研究, 16(2), 109-121.
- 野村晴夫(2014). 生活史面接後の「内なる語り」—中高年の不随意的想起に着目した調査—. 心理臨床学研究, 32(3), 336-346.
- 大石真吾・高橋優佳・浅田恵美子・井芹聖文・千秋佳世・加藤奈奈子(2011). 特別養護老人ホームに箱庭を持ち込む試み—「鮮やかさ」という視点の生成—. 心理臨床学研究, 29(3), 317-328.
- 太田一実・村山憲男(2017). WAIS - IIIの簡易実施法はレビー小体型認知症の認知機能評価にも利用できるのか. 心理臨床学研究, 34(6), 659-664.
- 小澤義雄(2013). 老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造. 発達心理学研究, 24(2), 183-192.
- 坂田陽子・ロノ町康夫(2014). 対象物の形, 模様, 色特徴抽出能力の生涯発達の変化. 発達心理学研究, 25(2), 133-141.
- 佐々木直美・柿木昇治(1998). 加齢にともなう心理・生理的機能の変容—バウムテスト, GHQ, 要求水準課題および心臓血管系反応を指標として—. 心理学研究, 69(3), 229-234.
- 佐々木直美・上里一郎(2003). 特別養護老人ホームの軽度痴呆高齢者に対する集団回想法の効果の検討 MMS, 行動評価, バウムテストを用いて. 心理臨床学研究, 21(1), 80-90.
- 佐々木玲二(2012). 風景構成法のしくみ 心理臨床の実践知をことばにする. 創元社.

- 貞木隆志・小海宏之・朝比奈恭子・岡村香織(2003). 色塗り法に反映される痴呆性高齢者の臨床像. 心理臨床学研究, 27(2), 191-195.
- 貞木隆志・小海宏之・岡村香織(2005). 色塗り法に反映される痴呆性高齢者の予後と臨床像の変化. 心理臨床学研究, 28(1), 124-128.
- 柴田雄企(2001). STA (高齢者絵画統覚検査) の軽度痴呆性高齢者への有効性—痴呆のない高齢者との比較—. 心理臨床学研究, 19(4), 342-352.
- 下仲順子(1979). 老年期の人格. 日本の中高年(4). 老化のプロセスと精神障害 戸川行男・保崎秀夫・守屋国光 (編) p.185 垣内出版.
- 鈴木亮子(2008). 認知高齢者への心理学的援助としての個人回想法. 心理臨床学研究, 25(6), 721-726.
- 妹尾香織・高木 修(2004). 高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連. 心理学研究, 75(5), 428-434.
- 孫 琴(2008). 認知高齢者の抑制機能に関する研究—抑制機能及び関連する認知機能を中心とした検討—. 発達心理学研究, 19(3), 275-282.
- 田淵 恵・権藤恭之(2011). 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響. 心理学研究, 82(4), 392-398.
- 田淵 恵・三浦麻子(2014). 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討. 心理学研究, 84(6), 632-638.
- 田淵 恵・三浦麻子(2014). 高齢者の利他的行動としての「語り」に与える世代間相互作用の影響—実験場面を用いた検討—. 発達心理学研究, 25(3), 251-259.
- 高橋紗也子(2014). 初期アルツハイマー型認知症の高齢者の内的世界—風景構成法の風景に位置づけられる自己像を通して—. 箱庭療法学研究, 27(1), 53-64.
- 竹田伸也・井上雅彦(2005). 重度認知症高齢者への動作療法の治療要因. 心理臨床学研究, 23(3), 305-315.
- 竹田伸也・井上雅彦(2009). 慢性疼痛を呈した高齢者に対する動作療法の試み. 心理臨床学研究, 27(5), 524-533.
- 竹村明子・仲真紀子(2013). 身体や健康の衰退に調和するための高齢者の対処—二次的コントロール理論を基に—. 発達心理学研究, 24(2), 160-170.
- 竹中星郎(1996). 老年精神科の臨床. 岩崎学術出版社.
- 構木てる子・下垣 光・小野寺敦志(1998). 回想法を用いた痴呆性老人の集団療法. 心理臨床学研究, 16(5), 487-496.
- 若本純子・無藤 隆(2006). 中高年期における主観的老いの経験. 発達心理学研究, 17(1), 84-93.
- 矢口大雄・亀口憲治(2016). 軽量粘土を介した認知症高齢者と援助者の相互影響過程. 心理臨床学研究, 34(4), 446-455.
- 山口智子(2000). 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み—回想についての基礎的研究として—. 心理臨床学研究, 18(2), 151-161.
- 山口智子(2002). 人生の語りにおける語りの変容について—高齢者の回想に関する基礎的研究—. 心理臨床学研究, 20(3), 275-286.
- 山田典子(2000). 老年期における余暇活動の型と生活満足度・心理社会的発達の関連. 発達心理学研究, 11(1), 34-44.
- 山下 光(1998). アルツハイマー病患者の言語性短期記憶障害—自由再生法による検討—. 心理学研究, 68(6), 471-477.
- 吉川麻衣子・田中寛二(2004). 沖縄県の高齢者を対象とした戦争体験の回想に関する基礎的研究. 心理学研究, 75(3), 269-274.
- 吉川桃子(2013). 地域在住認知症高齢者の居場所をつくる心理臨床学的支援—高齢者間の相互的交流と役割感に着目して—. 心理臨床学研究, 31(4), 640-650.
- 吉田 甫・孫 琴・土田宣明・大川一郎(2014). 学習活動の遂行で健康高齢者の認知機能を改善できるか—転移効果から—. 心理学研究, 85(2), 130-138.